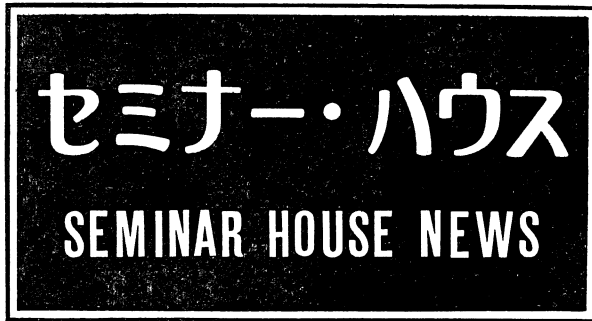


第14号 20円  
昭和43年 7月25日

内容

- 開館三周年と私の期待… 1
- テニスコート完成を  
祝う…………… 2
- 千人会…………… 3
- 新入学生歓迎セミナー… 4
- 伸びゆくセミナー・  
ハウス…………… 6,7
- 第16回大学共同セミ  
ナー…………… 8
- 利用状況…………… 9



発行  
財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》  
東京都八王子市下柚木  
電話 0426-76-8511-2

《東京事務所》  
東京都中央区日本橋本町3の3  
三井銀行本町支店ビル3階  
電話 東京(270)4431  
振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎  
製作 中央公論事業出版

開館三周年と私の期待

—— 標語の額面にそえて ——



昭和36年11月30日  
財団法人設立発起人会 丸ノ内日本工業倶楽部

大浜信泉

その実現となると、まったく雲をつかむようなもので、正直なところ自信がもてなかった。ところで、人間の一念はおそろしいもので、飯田氏の執拗なほどの熱心な勧誘によって、大学の関係者の間にだんだん共鳴者が増え、これに対応して財界にも応援者が現われて、とにかくあれだけの施設が出来あがり、さらに年を追うて拡充されつつあるのである。

大学で学ぶことの尊さは、それぞれの専門分野について体系的の知識を学習することのほか、研究方法の体得すなわち学問の仕方との魂のふれ合いによる人間形成、さらによき友を作ることにありといえよう。セミナー・ハウスは、この目的に適合した場を提供し、もっともそれにふさわしい雰囲気醸成することを指向しているが、この関連においてセミナー・ハウスには、個々の大学に求めることの出来ない大きな特典がある。他大学の有名な学者に直接接しその指導と感化を受けることができるほか、学問を通じての交友の範囲を他大学にひろげ、多くのよき友人を作ることが出来ることそれがそれである。

大学セミナー・ハウスは、奇蹟的に出現したが、この上は、その機能と成果の上に奇蹟の現われることを期待してやまない。

(大学セミナー・ハウス前理事長 早大名誉教授)

▽余 録 (毎日新聞)

「目に青葉山ほととぎす初かつお」——早くも新緑の美しい季節である。この日曜日、筆者は、二〇人ばかりの大学生と、新緑の東京郊外に、日帰りのバス旅行をした。山ほととぎすにはまだ早く、初カッオもなかったが、私にとっては、中央高速道路の初ドライブも快適に、八王子郊外野猿峠の大学セミナー・ハウスを訪れた。これは、昭和四〇年七月に完成した、学生と先生との勉強の交流のための施設である。民間の寄付金一億五〇〇〇万円を建設費に、早大建築学科吉阪隆正教授のユニークな設計で、でき上がったもの。最近の一年間に、利用者三万三、〇〇〇人余という実績をあげている。いまは、ちょうど新学期なので、国立、私立の大学新入学生のアリエンテーションのための利用が盛んだ。すでにその予約で、七月までいっぱいだが、一橋大学などは、七八〇人の新入生全員を、一回約二〇〇人ずつに分けて、学長以下先生も学生も泊まり込みで、二泊三日の指導をするという。せまい入学試験の関門をやっとならして、大学生になった。が、広い講堂で学長や教授の一方的なお話を聞かされても、若い学

(2頁下段へ続く)

### 新しい施設を加えた喜び 梅雨どきにも天候に恵まれ

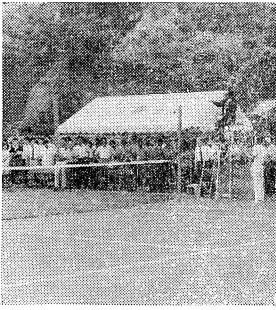
—— テニスコート完成を祝う ——

日本自転車振興会の補助金をうけて  
開場式 昭和四三年六月二十九日

総工費五五〇万円、清水建設の  
施工でテニスコート一面が新しく  
設けられた。何か軽いスポーツの  
できる施設がほしいという学生た  
ちの願いがこんなにも早く実現し  
たのは、日本自転車振興会が工費  
の半額を補助してくれたからであ  
る。お金というものは有難いもの  
である。「協力」というものの本  
質を式に出席された学生は実感さ  
れたらしい。

青葉を通してテニスをする若い  
学生の姿も見られ、五群の宿舎に  
は軽いボールの音がひびき、セミ  
ナー・ハウスの雰囲気は急に生々  
としてきたようである。文字通り  
学問とスポーツが調和している環  
境を現出した感がある。

当日の式には折柄宿泊中の共同  
セミナーの学生と明治学院大学の  
増田ゼミの学生が参加し、梅雨ど



きには珍しく天候に恵まれ、午後  
一時三十分から楽しいコート開き  
ができた。

前理事長大浜信泉先生がこの日  
のためにおいで下され、挨拶をさ  
れついで大浜杯を寄贈された。次  
に飯田専務理事が経過報告の後に  
専務理事杯を寄贈する。いよいよ  
試合開始となり、まず大浜先生が  
審判台にのぼられ、始球をコート  
に向けて投げられ、一同の拍手が  
一瞬さわやかな風景をつくった。

審判には立教大学

軟式庭球部奉仕

大浜杯(優勝) 土田、八木岡組

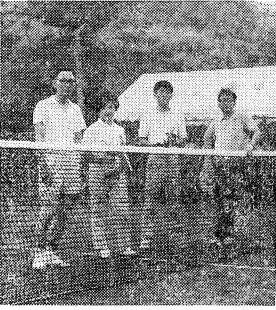
(当ハウス職員)

専務理事杯(準優勝)

深沢、水上組

(共同セミナー)

当日の出場者は共同セミナーの  
参加者、明治学院増田ゼミ、成隣



大学学生、青山学院大学OGなど  
一八組で、立教大学院庭球部員の模  
範試合のすばらしい腕前とは、大  
部距離があったようだが、素人な  
がら熱戦を展開し、殊に共同セミ  
ナーのFセクションからは一橋大  
学助教教授深沢宏先生と信州大学一  
年の水上秀敏君が出場され、深沢  
先生の熱戦が特に注目をひき、セ  
ミナー・ハウス職員の土田、八木  
岡組と接戦の上3対0で惜しくも  
優勝を逃がした。幸わせにもセミ  
ナー・ハウスにとっては歴史的な  
一日であった。

### あれから十年

—— 創生記の第一章 ——

飯田宗一郎

一九五九年(昭和三四年)の年

頭所感を私が上代たの先生に書き  
送ったのが大学セミナー・ハウスの  
歴史の始まりである。あれから  
一〇年になるから開館式をするま  
での七年間がいわば創生記に属す  
る時代である。私は幸わせにも健  
康に恵まれ、協力者が与えられ、  
正に幻を追うて七年の歳月を送っ  
たのである。

上代先生は私の構想に非常な関  
心を示され、その計画を進めるた  
めには国立大学の代表として東大  
の茅総長、私立大学の代表として  
早大の大浜総長を仲間に入れるこ

とがよいというアドヴァイスをし  
て下さった。大浜先生は私立大学  
連盟の会長であったから理事会と  
か総会などで顔見知りの間柄であ  
るが、茅先生は全く無縁の人であ  
ったので、上代先生が仲介の役を  
果たしてくれたのである。

その年二月二七日東大総長室に  
茅誠司先生を訪問する。これが私  
と茅先生との初対面であったが、  
私の運命はこの日から新しく転回  
し始めたのである。

そして三月六日には早大総長室  
に大浜信泉先生を訪問した。かく  
して国立と私立のワクをとった大  
学共同の施設にふさわしい強力な  
三人の支援者が与えられた。この  
三人の組合わせは絶妙ともいうべ  
く、よくも同じ年代に地上に生き  
ておられたものかと驚歎するばか  
りである。私はこの三先生との出  
会いにおいてこの構想を可能にし  
たのである。

この構想の実現には、大きな資  
金を必要とする。財界のどなたが  
こうしたことに協力してくれるで  
あろうか。その「どなた」を探す  
ことが我々四人の当面の課題とな  
った。募金はいやなことだし、そ  
うこんな大役を引きうける人はい  
ない。実際に金を集めなければな  
らないので、名前だけ借りる程度  
のことで意味がない。引きうけ  
たら誠実に募金を手伝って下さる  
方でなければならぬ。

私は三井銀行会長佐藤喜一郎氏  
が人物、力量、声望ともに最適任

(1頁から続く)  
生にはピンとこない。マスプロ講  
義もおもしろくない。運動部には  
いる気もなし、いっそのこと、全  
学連のデモにでも参加してみよう  
かと思うが、それもちょっとこわ  
い——これが「五月病」と呼ばれ  
る新入学生の病気だ。もし二〇人  
ぐらいの単位で、二四時間中、先  
生と学生が寝食をともにし、フロ  
ア場では文字どおりハダカでつき合  
い、緑の山道をいっしょに散歩  
し、夜を徹して語り合う幾日かを  
過ごしたら、五月病も避けられる  
だろう。いまのマスプロ教育の欠  
陥を補うために、大学セミナー・  
ハウスの利用は意義深い。佐藤首  
相は、来日中のオーストリアのク  
ラウス首相と、学生問題を語り合  
ったそうだが、学生問題の根本  
は、こうした心の交流をどうして  
回復するかにある。大学セミナ  
ー・ハウスは学界、財界の共同で  
できた民間施設だが、政治家の目  
も、こういう「血のかよった大学  
教育」へと向けられるべきだろ  
う。

(昭和四三年四月二四日発行)

であることを確めた。一九六一年  
(昭和三十六年)七月二日、茅、  
大浜両先生とともに同氏を訪問し  
その協力を懇請した。私は秘かに  
この人との出会いを感謝する祈り  
を神に捧げたのである。これから  
計画は急速に進展した。

千人会 共鳴を呼び三三四名に達す  
第三回申込報告(申込順)

C	都立大教授	柳沢 富雄殿	B	成蹊大助教授	宇野 重昭殿
C	都立大助教授	久世 寛信殿	C	成蹊大助教授	宇野 重昭殿
C	慶応大助教授	中田 美喜殿	C	青山学院大助教授	豊殿
C	都立大助教授	小池 滋殿	C	横浜国大教授	武藤 義夫殿
C	東京外国語大教授	宮川 透殿	C	順天堂大教授	関根 隆光殿
C	順天堂大学助教授	山本 武彦殿	C	中央大助教授	寺内礼治郎殿
C	中村英勝教授夫人	中村 妙子殿	C	東大助教授	古沢 潔夫殿
B	お茶の水女子大	尾鍋 輝彦殿	C	都立大教授	塩田庄兵衛殿
B	慶応大助教授	林 喜男殿	C	横浜国大助教授	平出 彦仁殿
B	早大助教授	田中弥寿雄殿	C	東京外国語大助教授	小浪 充殿
B	順天堂大教授	榎林博太郎殿	C	順天堂大教授	山本 幹夫殿
B	慶応大助教授	松原 秀一殿	C	明大助教授	大橋健八郎殿
C	お茶の水女子大教授	尾鍋 輝彦殿	C	東京学芸大助教授	蓮見 音彦殿
C	中村英勝教授夫人	中村 妙子殿	C	成蹊大助教授	下城 庸世殿
C	順天堂大学助教授	山本 武彦殿	C	慶応大助教授	北村 宗彬殿
C	都立大助教授	久世 寛信殿	C	日本女子大名誉教授	大原 恭子殿
C	慶応大助教授	中田 美喜殿	C	都立大助教授	奥山 典生殿
C	都立大助教授	小池 滋殿	C	都立大学教授	東 洋一殿
C	東京外国語大教授	宮川 透殿	C	お茶の水女子大教授	山西 貞殿
C	都立大教授	柳沢 富雄殿	C	上智大助教授	平井 久殿
C	順天堂大学助教授	山本 武彦殿	C	法政大学教授	中村 孝俊殿
C	中村英勝教授夫人	中村 妙子殿	C	東京教育大講師	鈴木 博雄殿
B	お茶の水女子大	尾鍋 輝彦殿	C	成蹊大学教授	増地 昭男殿
B	慶応大助教授	林 喜男殿	C	法政大学教授	秋田 成就殿
B	早大助教授	田中弥寿雄殿	C	法政大学教授	大地 羊三殿
B	順天堂大教授	榎林博太郎殿	C	青山学院大教授	新見 宏殿
B	慶応大助教授	松原 秀一殿	C	都立大学教授	東 洋一殿
C	お茶の水女子大教授	尾鍋 輝彦殿	C	お茶の水女子大教授	山西 貞殿
C	中村英勝教授夫人	中村 妙子殿	C	上智大助教授	平井 久殿
C	順天堂大学助教授	山本 武彦殿	C	法政大学教授	中村 孝俊殿
C	都立大助教授	久世 寛信殿	C	東京教育大講師	鈴木 博雄殿
C	慶応大助教授	中田 美喜殿	C	成蹊大学教授	増地 昭男殿
C	都立大助教授	小池 滋殿	C	法政大学教授	秋田 成就殿
C	東京外国語大教授	宮川 透殿	C	法政大学教授	大地 羊三殿
C	都立大教授	柳沢 富雄殿	C	青山学院大教授	新見 宏殿

B	横浜国大教授	山田 潤二殿	B	神奈川大助教授	小宮山美枝子殿
B	青山学院大教授	石井 千尋殿	B	神奈川大助教授	田村 献殿
B	法政大学教授	尾形 憲殿	C	神奈川大助教授	奥原 忠弘殿
C	慶応大助教授	笹島 恒輔殿	C	青山学院大教授	白浜 謙一殿
C	青山学院大助教授	佐久間章行殿	C	青山学院大教授	福島 杉夫殿
C	東京学芸大助教授	谷 俊治殿	C	青山学院大助教授	福島 杉夫殿
C	青山学院女子短期大学助教授	筑波 常治殿	C	青山学院大助教授	福島 杉夫殿
C	中央大学教授	近藤 圭一殿	C	東京大学経済学部事務長	関田 寛雄殿
C	中央大学教授	近藤 圭一殿	C	東京大学経済学部事務長	関田 寛雄殿
C	中央大学教授	近藤 圭一殿	C	東京大学経済学部事務長	関田 寛雄殿
C	中央大学教授	近藤 圭一殿	C	東京大学経済学部事務長	関田 寛雄殿
C	中央大学教授	近藤 圭一殿	C	東京大学経済学部事務長	関田 寛雄殿

施設拡充資金寄付者  
(第6回報告、昭和43年4~6月)

10,000円	日本基督教団阿佐ヶ谷教会会	5,000円	日本女子大職員
10,000円	女子美術大デザイン部松井ゼミ	10,000円	電々公社電気通信研究所殿
5,850円	明治学院大リーダースキャン	10,000円	上智大学殿
3,000円	日本女子大校楓会	7,500円	上智大学第一回学内共同ゼミ
6,000円	慶応義塾大学高村ゼミ	10,000円	三井化学工業殿
4,000円	上智大学カトリック学生の会	1,000円	国際商科大学島谷チエール
2,000円	都立商科短大第一部学生自治会	500円	国際商科大学教授
10,000円	立正大学杉沢ゼミ	1,000円	法政大学講師
5,000円	明治学院大グレゴリーバンド	10,000円	東京女子大校長
5,000円	東京都立大教授	5,000円	東京農工大農学部教官
1,000円	日本大学講師	1,000円	日本大学マンダリンクラブ
500円	東京都立大教授	10,000円	日本女子大OG
1,000円	フェリス学院大園部ゼミ	2,000円	一橋大学助教授
3,500円	東京都立工業短大生産管理学科	2,000円	フェリス学院大学生
2,000円	立教大学大学院生	5,000円	フェリス学院大英文学研究会
1,000円	成蹊大学広野ゼミ	10,000円	日本航空電子工業
500円	中央大学近藤ゼミ	1,000円	東京大学助教授
500円	青山学院大坂井ゼミ	6,000円	千葉商科大学大桃ゼミ
1,000円	日本女子大図書館事務主任	5,350円	第一七回大学共同セミナー
1,000円	日本女子大助教授	5,350円	【ユニット宿舎の洋傘立て製作のため】
1,000円	日本女子大図書館友の会幹事	5,500円	第一七回大学共同セミナー
1,000円	北野美枝子殿	C	セクション殿

# 新入学生歓迎セミナー

〔昭和43年6月28・29・30日〕

## ◆主題◆

学問と人生——大学と現代人の課題にふれて——

### 【全体講義】

東京大学名誉教授

一橋大学教授

【ゲスト】

評論家

【セクション指導】

早稲田大学教授

上智大学教授

東京大学助教授

立教大学教授

東京大学助教授

一橋大学助教授

学習院大学教授

▲運営委員長▼

坪井忠二氏

板垣与一氏

坂西志保氏

川原栄峰氏

鈴木皇氏

芳賀徹氏

久保田きぬ子氏

小堀巖氏

深沢宏氏

児玉久雄氏

学習院大学教授

【参加学生】

六六名(うち女子二三名)

早大(一〇)、日女大(八)、津

田塾大(六)、東大(四)、中大

(四)、慶大(三)、東女大(三)、

専修大(三)、武工大(三)、一橋

大(二)、武蔵大(二)、独協大

(二)、東京理科大(二)、信州大

(二)、フェリス学院大(二)、東

外大、都立大、明学大、法大、成

蹊大、神奈川大、立大、上智大、

学習院大、弘前大、各一名。

## 大学交流の実験場

一橋大学助教授

深 沢 宏

共同セミナーに初めて参加し、特に強く受けた印象を四つほど記して、セクション・リーダーとしての責任をひとまず果たさせて頂きたいと思う。

第一に、私の経験した限りでは、先生たちと学生諸君との間に、世代の相違から来る違和感のようなものが殆んど感じられなかった。学生諸君は先生たちの話に熱心に耳を傾け、先生たちもまた

学生の疑問や意見を本気で聞き、これに本気で答えておられたが、その姿は実に美しかった。

第二に、先生たちに対する学生諸君の態度も概して立派だと思つた。以前の学生は、先生に対して礼儀は正しくとも率直でない面があったのに対し、最近の学生は、確かに率直になった反面、言動が粗野になったのではないかと危惧を私は持っていたのであるが、今回接触した学生諸君は、セミナーでも講演会でも、礼儀正しくかつ率直に自分の意見や感想を述べの人が目立った。これは清々しい光景であった。

第三に、学生諸君の間でも、所属大学のカラーを捨てて、別の学校の学生と進んで悩みを相談し、意見を交換する気風が見られたが、これも甚だ結構な傾向だと思つた。以前の学生は、大学の閉鎖性を当然のことと思ひ、むしろこれを得意とする様子があったのに対し、現在の学生はこの閉鎖性に息苦しさを感じているわけで、これはやはり進歩だと感じた。日本の大学のいびつな閉鎖性は早く改革される必要があるというのが私の持論でもあるので、制度の変革をまたずに、変な派閥根性を持たない学生がふえているのは喜ばしいことだと思つた。

中に埋設してしまわないで、毎日少なくとも二、三時間は、一人で静かに勉強する習慣を是非とも身につけて頂きたい、ということである。

## 「洗脳」の三日間

東京大学教養学部助教授

芳 賀 徹

医学部問題をめぐってざわめきつつける駒場のキャンパスを出て、大河内総長の学生会見の記事を夕刊で読みながら八王子にむかした。東大はどうなるのだろうか。またどうすべきか、という押しかぶさるような疑惑とまどいが、私の心のなかにあった。そしてまた一方、私にとってはじめてのセミナー・ハウスに対する不安とかな期待も、私の心をふるわせていた。

下山していまかえりみると、あの三日間のセミナー生活は、参加学生の方にも飯田理事のいわゆる「洗脳」的经验を与えたかも知れないが、少なくとも私自身にとってそれは明らかに「洗脳」の効果をもっていたことに気がつく。現在の大学問題に、自分の能力の限り、従来よりもっともつと積極的に大胆にぶつかり、考えてゆかねばならぬ、という責任感と一種の勇気を、あらためて私のうちにめざめさせてくれたのである。実際、あの真剣でういういしく

て熱烈でひたすら学生たちをあずかり、教育する者として、いまの大学をいまのような無責任な、遅鈍な官僚的組織のなかに自縛自縛にしておいてよいのか。彼らのかかえている多種多様な可能性と湧きかえるような熱情とを、古い功利的な大学の枠で締めあげ枯らしてしまふようなことにさせておいてよいのか。——セクション・セミナーで、全体講義で、また最後の報告会で、参加学生の話を書きながら私はそう反省させられ、督促されるような気持にならずにはいられなかったのである。



全員揃って一講堂前で

一橋大学教授  
板垣与一

全国から集り来たった熱心な学生諸君や、すぐれたセクション・リーダーの諸先生と、朝の10時から夕方6時まで、学問と人生について語り合った経験は、いつまでも記憶に残る得難い出来事でした。

千人会入会の記念として御恵送いただいたすばらしい文鎮は、常に私の机上を飾って、あの快い記憶を呼び起こすクサビとなってくれます。いよいよ御発展を祈ります。

(専務理事宛の書翰より)



板垣先生を囲む学生たち

参加学生は思う

自分の問題を知る

松村 陽子

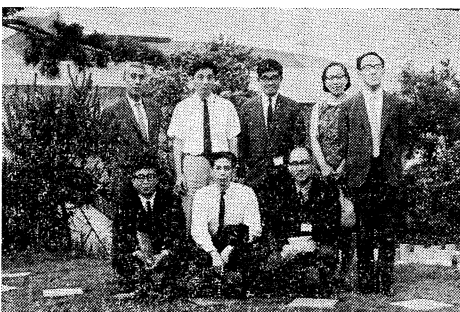
私は大学に入学してみても、大学、あるいは大学生に対してある種の絶望感を感じ、漠然とその日その日を送ってきた自分の大学生活に対しても空白感を覚え、さらにこのままの状態でも四年間の大学生活を送ってしまうかも知れないという不安をいつも感じながらどうすることもできずに今まで過ごしてきました。ですから、このセミナーには、こういう状態を打ち破るきっかけを求めて参加しましたが、この問題は結局自分自身に帰するものであると思えましたし、セミナーにあまり期待をかけすぎて失望するのを恐れて、かなり消極的な態度でセミナーにやってきました。

そんな私でしたが、不思議なことに三日間が過ぎて振り返ってみると、いつの間にか自分もセミナーの渦の中に飛び込み、いろいろなことを感じ、知り、考えていました。

私にとって何よりも嬉しく感じたことは、さまざまな問題をほんとうに真剣に考え、自分の問題としてとらえて行こうとする他の学

生の姿に接したことでした。私は入学してから今まで、特に大学生そのものに強く失望し、それまでもっていたあこがれや期待が目の前からどんどん崩れ去って行くのを感じていました。けれど、このセミナーで接した他の学生の態度によってほんとうに新たに勇氣付けられました。そして、さらに、今まで自分とは全くかけ離れた存在のように思っていた先生方からお話を聞き、直接話し合うことによって、今までに感じたことのない一つのものに徹する人の純粹さとその情熱や、人間としての大きき暖かさを感じて、何か心の中に暖かい火がともったように思えました。(日本女子大学一年)

セクション指導の先生たち  
前列右より児玉、川原、深沢  
後列右より鈴木、久保田、小堀、芳賀  
飯田



大学生活への道標

早大 近藤 雅世

すばらしい三日間をどうもありがとうございました。私は数人の人に感想を聞いてみましたが、不満を述べる者は一人もなく、どうやらこの文章は、感謝の言葉で埋まりそうです。大学セミナー・ハウスは飯田先生はじめ多くの方々の真心の結晶であり、私にはそこに、二重にも三重にもめぐらされた心づくしが切々と感じられました。たとえ、わざわざ便所を遠くに置き「不便さ」を体感させる心ざしとか、最後の日に、傘立がないという意見に対して飯田先生が答えられた「気が付いた事で自分でできる事は、工夫し行動すべきこと」によって自分で解決すべきだ。このセミナー・ハウスの向上のために積極的に参加してほしい」とのお言葉には非常に感激致しました。全くこれは、善意と誠実さがよどみなく通るすがすがしい世界です。

私はこの三日間に多くのことを学びました。その中でも一番大きいのは、自分が学問への主体性、積極性をもち、学問をすることに對する欲求が増大したことにあります。もう夏休みに入りますが、この夏休みには是非推薦して下さい。その書物を読んでみたいと思います。それに、私はこのセミナーで

もう一つ大きな収穫を得ました。それは、芳賀先生を中心に読書会が、来週を第一回にして今後、年数回持たれることになりました。私にとっては初めての教授との交りや、交友は、他のセミナー同様に長く続けられて行くことでしょう。この三日間は多くの新入生にとって、正に出会いとなり、彼らにさまざまな形で影響を与えたことでしょう。私は、ここを訪れた者の中から必ずや、現代社会の知的退廃を救う者が現れることを確信致します。

遠来の学生をねぎらうため、弘前大学の亀井君、信州大学の水上君に送別会の席上で飯田専務理事は記念品を贈った。大津の鉄道脱線事故で京都からは残念ながら不参加だったが、共同セミナーも年を追って全国に広まることを示している。よいことである。



理想と現実が一致したもの

すばらしい創造性と人間の善意

### 会員校としての喜び

武蔵工業大学学長  
山田良之助

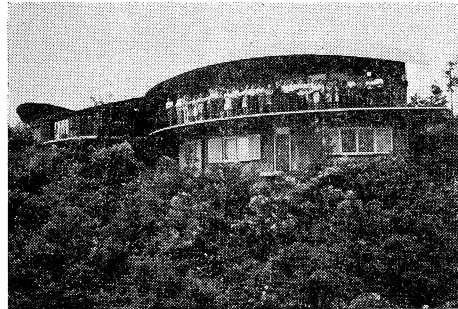
大学セミナー・ハウスが創立されてはや三周年を迎えることになりました。永遠に続くであろうこのセミナー・ハウスの生命の中の三年といえ、短いようではあるが、しかし最初の三年といえ、わめて大切な創設の時代の三年は決して短いとはいえないでしょう。それについても、発案者である飯田専務理事や、この案を暖かく抱いて育てて下さった数々の学

# ナー・ハウス を顧みて

会、財界の先輩の方々、深甚の感謝の意を捧げたいと思います。上代先生はそれらの先輩の方々の中でも最年長であるということであり、確

生とお二人の立話を傍で拝聴する機会を得ましたが、お二人の生まれ年は同じ、では生まれ月は……ということになってこれも同じ、では最後に生まれ日はということになって、この話は終ったようでもあります、それにしても誠に元氣そのもののお二人でありました。セミナー・ハウスの創立以来これを活用させていただいているものの一人として改めて上代先生に厚く御礼を申し上げる次第であります。

大学セミナー・ハウスが施設も次第に充実せられ、ここに集まる教師、学生にますます魅力あるものとなってきたことは喜ばしいこととありますが、その反面現代大学の趣旨がより強く認識せられなければならないことは重大な問題といえましょう。私共はこの施設が単に消極的な面ではなく、同時に積極的に学問の場としてのこの施設を活用させていただきたいと思



建築中の松下館より 図書館、講堂の眺めは殊によい。

お祝—その体験を通して

### すばらしい

### 対話の場

長松 昭男

先生などの方々にはじかに接する事ができるのは、セミナー・ハウスならではのすばらしい事です。私の決して到達できない偉大な人格との対話は私にとってこの上ない魅力でした。ただ時には、共同セミナーの内容が人文系であり、私も専門化されすぎていたために、私のような技術屋がついて行けない事もありました。最近博士論文のための研究に追われるようになったのと、妻子ある身になって経済的にきわめてきびしくなったので、セミナーにもあまり参加できなくなりましたが、将来もしどこかの大学に勤める事が出来たらなら、学生をひきつけてセミナーに参加したいものだと思

### 有縁の絆

### となる

小宮山美枝子

セミナー・ハウス三周年おめでとうでございます。記念講演会には出席できませんが、私も皆様と共に記念の会に連なっている気持ちがあります。

ふり返ってみますと、学生時代は勿論のこと、卒業して一年余の今日も、セミナー・ハウスの群に加えていただき、何ものにも代えたい経験を数々させていただきました。大学の負わされている課

題をさまざまな角度から考えていた第三回共同セミナー・パネルディスカッションで、永井先生はじめ多くの先生方と、共に行動しはじめることを誓ったあの前向きな姿、マルティン・ニーメラ先生の講演、都留先生を囲んでの何度にもわたるセクシオン演習の発展、マルセルと出会ったセミナー「実存思想と現代」、佐古純一郎先生の危機感溢れるお話、西村先生の独唱、セミナー・ハウスで迎えた成人式、そして何よりも飯田先生の信仰と愛に満ちた生き方、その一つ一つが、今生々しく甦えり、激しく語りかけ、心の奥底をゆさぶるのです。

卒業前に参加した共同セミナー「実存思想と現代」が終った時、飯田先生は、これからも共同セミナーの案内は出しますよ、とおっしゃって下さいました。卒業後何ヵ月か経って、先生のお言葉通り丸山真男先生の共同セミナーの案内を山梨まで送っていただいた時は飛び上がるほどうれしく、また新たな思いでセミナー・ハウスに連なる自分を意識しました。

大学に失望しつつある多くの学生に、セミナー・ハウスが、真に学ぶ機会を豊かに与えることができるようになることを願いつつ、ささやかであっても私のできることを、これからずっと探し続けていこうと思っております。(昭和42年度上智大卒、山梨県立高校教諭)

# 伸びゆくセミナー —— 3年の歩み

## 卒業生の寄せる若き日の体験記

学ぶことを知る 犬塚 博

大学を卒業し、勤めの関係で、京都に来ていて、時折上京する機会はある。あの八王子の丘を訪ねることができず、施設が充実し、発展を続けるハウスを、この目で確かめることができません。今また、松下館の建設が進められているとのことであり、ハウスが私の記憶にある姿から、相当に変わってしまったのではないかと、危惧に似た思いを持っています。

私がハウスから学んだ最大のものは、学問をはじめとするさまざまな物事に対する、ひたむきで真摯な情熱と、人と人へと接する時の穏やかな愛情深い態度です。諸先生方と、セミナーに参加された多くの人々を通して、私も少しでも良いから、身に付けたいと願ったことでした。ハウスの施設が昔と変わり、訪れる人が変わっても、ハウスの基をなすものは、今も変わっていないことと、行きますし、それは是非とも守って行くべきものと信じています。

### 善意と信頼を学ぶ

大川 陽子

大学を卒業して以来、何度か八王子を訪れる機会に恵まれた。今回は開館三周年記念セミナーが開かれると聞き、いささか驚いた。大学四年生の秋に、はじめて大学セミナー・ハウスを訪れてから、早や三年になるのだろうか。

その時の落成記念共同セミナーに参加して、私は、大学四年間、私なりに勉強はしても、学問はしていなかったということを痛感している。学生時代の補いの意味も含めて、学問に触れたいと思い、研究室に残った。今年で三年目になるわけだが、はたしてそれだけの進

歩が自分自身にあつたかどうか疑問である。学問と教育という環境の中で、先生方や学生に囲まれた毎日の中で、自分を顧みる時、セミナー・ハウスは私を絶望感から救い出してくれる。セミナー・ハウスに行けば、そこでは私のとるべき態度、なすべき事への糸口が必ず見つかる。そこは、学問と教育の大先達の集まりである。単にそれだけではない、その教育はオープンであり、その集まりは善意と信頼によるものである。

今後も、機会あるごとに、いや自分で機会をつくって、もっとたびたび八王子を訪れたいと思っている。  
(昭和四一年日本女子大学卒 日本女子大学家政科助手)

### 大学生活の中の重み

新田 久子

大学を卒業して二年になります。未だに学生の自分を、つい昨日までのように感じています。

それは、どんな環境にあつても、自己の疑問や悩みを回避することなく、素直にそれらに立ち向かうとする精神が、少なからず私の中に生きていくからだと信じています。そしてその精神こそ、セミナー・ハウスから教えられた多くであると思います。大学生活では、われわれは探れば探るほど、多くの未知を発見

し、語っても語っても、到底「つくす」ということのない情熱に自ら驚きます。

最近、千人会に入られた田内幸一先生が、セミナー・ハウスの夜の効用ということを言われました。「大学は夜も生きていなければならぬ。真のキャンパスライフの意味を肌で感じる事ができる。」これこそ、われわれのつきない探究の心を受け入れる、セミナー・ハウスの大きな意義であると考えます。  
(昭和四二年日本女子大卒 鉄鋼連盟勤務)

### 大学と社会へ押し返す力

海老沢 克之

およそ四〇〇の大学と、四〇万の学生が集中するという東京で、セミナー・ハウスの会員校は一部にもならず、紛争を続けている大学の多くをその中に見出すことができます。しかもそれは、いわゆる名の通った大学なのです。これらの大学が、教育の危機を感じ、変革を求めて行動する学生が多いために希望がもてる、という意味で評価されているとしたら、幸わせかもしれません。とすれば、セミナー・ハウスは、苦悩する大学、教師、学生にとって逃避の場ではなく、再建のための礎とならねばなりません。

善意の基金によって運営され、

誠実な先生方の奉仕に接して、多くの学生が人間としての交わりに感動し、人生の意味についての問いかけに感えました。確かに、セミナー・ハウスは学生生活の中で得がたい体験を与えてくれます。しかし、これが学生個人の主観的興味を満たすだけで、学生生活の楽しい思い出に終わってしまうならば、これは貧しい大学教育の補助機関にすぎなくなる恐れを感じます。セミナー・ハウスを愛する学生一人一人にとって、開館三年を経たこれからは、ここでの体験を学問の中で、あるいは新たな職場の中で、どのように位置づけるか問われることになりましょう。  
(東京工業大学大学院 修士二年)

(4頁より)

制大学ははじめて新しい大学となるだろう。彼らは決して一握りの少数派ではないはずだ。各大学の大多数の生まじぬ青年たちの代表であり、そのなかでの知的活動家たちなのだろう。いや少数派でも構わない。私はあのF君、K君、Nさん、Mさんのためだけに、革袋をつくりだすべき責任を感じる。そしてあらためてその督促を身に感じつつ、自分の職場の学生たちにも接しはじめていこう。なのである。

最初の試みとして  
長期連続セミナーを行う  
第十六回大学共同セミナー

主題 音楽と社会  
M・ウエーバー『音楽社会学』  
をテキストとして

【期間】(昭和43年6~11月)

【講義】

第一部 社会科学と音楽

——音楽の合理化とは——  
——どうということか——

成蹊大教授 安藤英治氏

第二部 西欧的音組織の基礎理論

東京女子大教授 池宮英才氏

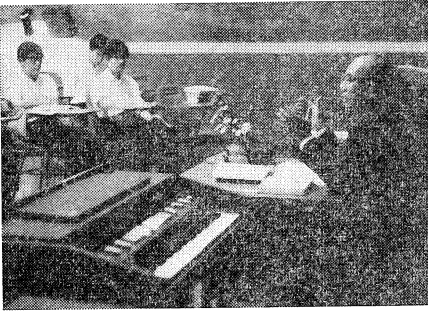
第三部 音組織からみた音楽史

東京芸大助教授 服部幸三氏  
東京芸大助教授 小泉文夫氏  
桐朋学園大助教授 角倉一朗氏

△参加学生V二五大学、一〇五名  
(うち女子三七名)

詳細は次号に記載

講義と演奏・池宮先生



標語の額をかけ  
食堂に気品を加う  
大浜信泉先生筆

Plain living and high thinking

は大学セミナー・ハウスの教育方針であり、生活指針であり、いわゆる標語である。この標語はワーズワースの詩の中の名句である。

このような額を食堂にかけようと思いついた動機は、昭和四一年三月二六、二七日に開催した第四回共同セミナーの主題に関する全体講義のためおいでになられた蠟山政道先生が、飯田専務理事に対し、「この食堂は単に飯を食べるだけの場所ではなく、自らセミナー・ハウスの気風をつくるところでありたい。英字よりも、むしろ毛筆の日本字がよいであろうが、この標語が、あるいは適当な言葉を書き添えてもらったらどうですか」という提案をされた。蠟山先生が御自分で僕が書くとおっしゃられればもっと早く実現したのであったが、諸先生ご遠慮なさって困っていたが、最も縁りの深い大浜先生が、敢えてご承諾下さった。

六月二十九日テニスコート開きに  
おいで下さったときに、同先生がご持参下さったものである。先生曰く「字は下手だが、製作代は自分が負担したから、むしろその方の金がかかりました」と。お礼も差し上げないで、書者が製作費も



額と大浜信泉先生

下さるといふ有難い贈物である。ここに集う学生たちが、国民として偉大であり自由であるために、自らの魂をこの標語によってつくってほしいのである。

物欲に駆られないように、浮薄な華美な生活を求めないように、昭和元録といわれるこの時代に、この標語の意味をいっそうよく汲みとってほしいと願うのである。

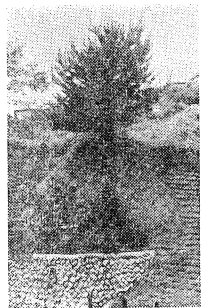
新しい名所ができる

大浜岬と名づけ

大浜信泉先生に感謝を捧ぐ

大浜信泉先生、この人の名は大  
学セミナー・ハウスの歴史―創生  
記―の冒頭に登場する。創立に貢  
献された方々に感謝する方法を考  
えることは飯田専務理事だけが秘  
かに工夫する唯一の趣味なのかも  
知れない。気のきいた、しゃれた  
構想が、彼の頭から生まれる。

早くも三年を経過したこの機会  
に、そしてコート開きにご来館さ  
れ地球式に立たれた機会に、約一



新名所 大浜岬

〇〇名の学生の参列する前で、飯田専務理事は大浜信泉先生と大学セミナー・ハウスの深い縁故を紹介され、感激的なお礼を述べ、構内の最南端、男松が一本そそり立つところ、その下に海ならず、テニス・コートの砂の表面があたかも海岸の岸辺にも比すべきところ、石垣の上につき出た丘の先端を含め、この周辺を大浜岬と呼称することにした。標識板が日本女子大学二年三根松子さんから大浜先生に贈呈された。

大浜先生の談「いろんなことで記念をしていただくが、地名に私の名をつけていただいたのは、これが始めてである。」さて日本の地図に大浜岬と書き入れられるのはいつの日か。

■寄贈図書

(昭和四三年四~六月)

- 「東南アジアの農業開発」
- 「ソ連・東欧の経済改革」
- 「イギリス紀行」 小島 憲正殿
- 「歴史の研究」第六巻 佐藤喜一郎殿
- 「早稲田大学生産研究所報」八冊



ある日の図書室風景

- 「コリアーズ・エンサイクロペディア」全二十四巻 長谷川幸雄殿
- 上智大学カトリック学生の会館
- 「国際関係論」 川田 侃殿
- 「帝国主義と権力政治」
- 「現代国際経済論」 川田 侃殿
- 「転形期の経済思想」
- 「ニューリタン」 力石 定一殿
- 「経済性工学」 大木 英夫殿
- 「老人社会学要論」 慶応工学会殿
- 笠原 正成殿
- 「経済学における人間像」
- 「日本の風土とキリスト教」 岡田 純一殿
- 「日本列島の地域構造・図集」 日本地域開発センター殿
- 「演奏の論理」 土田 貞夫殿
- 「ヘンリー・ジェイムズ短編選集」 川西 進殿

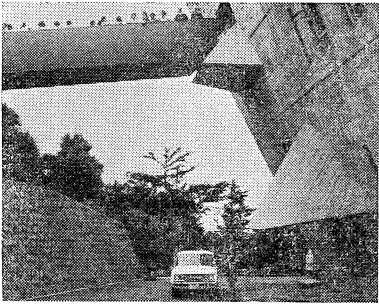


# 多人数グループの 利用の目的を探る

—— 新入生オリエン  
テーションなど ——

武蔵工大、津田塾大、東邦大、一橋大、学芸大のような新入生を対象にしたフレッシュマンキャンプやオリエンテーションを目的としたもの、学芸大の数学科、東京女子大の心理学科の如き学科の主体性において計画されたセミナーは、その学科に所属する教師と学生の心の交流を深めるのが目的であり、早稲田大学や上智大学の全学共同セミナーは学部にかかれていた大学を総合体の意識を持たせつつ共通のテーマで討議するの目的である。夫々大きな効果をおぼえつつ目的が年と共に明確にされるようである。講堂が新築されたため多人数の集会には大変な便宜を与えている。

本館玄関とブリッジ



## 上智大学学内共同セミナー の企画に参加して

学生 百瀬 敏 昭  
進 藤 浩

セミナー・ハウスが唱え、実践している Inter University ということは、各大学が、大学間の閉鎖性を打ち破り、大学たるアカデミックな次元で、共通して直面する課題・問題を考え切り開いて行く、ということでありましょう。同様なことが、一つの大学の段階でも、つまり Inter Faculty ということが、実際上我々の問題になってくるのであります。上智大学という大学が、何故をもって総合大学という有機的な統一体となり得るのか。各専門学部・学科の寄せ集めでないとするならば、またそうであってはならないとするならば、そこには何が求められ必要とされるのか。総合大学という名の大学は（あるいはこの場合単科大学であっても大学と名が付くならば）、大学という確たる知的程度での、成員間のふれ合い、各自の価値観・世界観の問い掛け合いの場、形成の場であるということが必要なのでしょう。

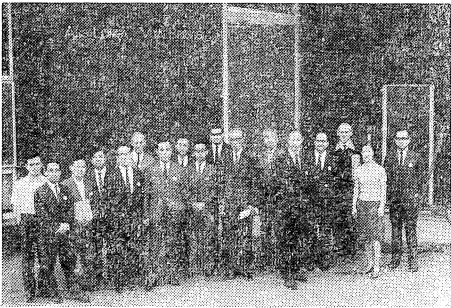
このような観点から出発するならば、我々はかならずしも上智大学の現状に満足しなかった訳であります。この大学が特色として標榜する大事な点で、大学の規模的

拡大の中で有名無実化して来たものもあります。真実・本物があり、進歩があるとしたり、我々は虚像・幻想と戦わねばならないし、現状批判的であらねばならない訳です。しかも、その現状批判は建設的でなければならぬもの、虚に對して虚を持つてするようなものになってしまふ。そんな意味を込めて出発したのが、この上智大学「学内共同セミナー」なのであります。

ここにその際の参加学生の感想を引用して、成果を述べます。

「人間性を離れての学問も、薄暗くカビ臭い書庫や書齋での学問もあり得るはずが無い。真のアカデミズムは明るく宇氣壮大なる自然の中にあつて、常に人間性を基と

上智大学の先生たち  
中央山内恭彦博士



して創造されるべきであろう。

八王子のセミナー・ハウスでの「学内共同セミナー」はこの意味で非常に有意義だと思う。自然は常に我々に失われがちな人間性を呼び覚ましてくれるのだから。昼は驚、夜はかわずの声を聞きながらの、今回のゼミナールは、お互いの信頼の絆、人間性を基とした連帯感で強く結ばれていたような気がする。芽ばえかけていた大学教育への疑問、不信感も、その解決に何か希望が見出されたような気がした。

今回の共同セミナーは、自然に恵まれた八王子セミナー・ハウスにおいて初めて成功した、ということも決して過言ではないと思う。

第一回の形式をセミナー・ハウス主催の「大学共同セミナー」に模したことも考え合わせて、この上智大学「学内共同セミナー」もセミナー・ハウスに負うところが大きかった訳です。

しかし、我々は決して今回のことに満足しません。問題の端著にたどり着いたところ、といった方が良いでしょう。そして、もう一言、あたりまえのことなのですが上智大学の Inter Faculty は決して大学の閉鎖性を増すものでなく、はじめの Inter University を志向するものであらねばならないことを、蛇足ながら申し添えておきます。

## ● 利用状況

### ◆ 四月

- 名古屋大学教授 吉原 邦夫
- フェリス学院大学教授 堀 信一
- 横浜国立大学教授 高島 光郎
- 法政大学教授 中村 孝俊
- 神奈川大学写真真研究部 内山 秀夫
- 慶応大学助教 堀部 政男
- 一橋大学講師 (新入社員合宿研修) 鈴木 成文
- 東京大学助教 平田 光弘
- 明治学院大学助教 西川 俊作
- 慶応大学助教 岡田 純一
- 上智大学助教 石坂 巖
- 慶応大学助教 安藤 英治
- 神奈川大学助教 中村 忠
- 専修大学助教 小林 健悟
- 都立大学助教 大羽 滋
- 日本機械学会生産管理研究会 三井 為友
- 都立大学教授 大村 勇
- 国際基督教大学室内薬研究会 笠井 芳夫
- 阿佐ヶ谷教会 小嶋 次男
- 日本大学助教 高村 象平
- 東京女子大シエイクスピア研究会
- 立教大学助教
- 慶応大学助教
- 女子美術大学デザイン部
- 日本国際問題研究所
- 電気化学工業 (新入社員教育)

東京大学教授 高橋 詢  
 独協大学写真部  
 横浜国立大学教授 金井 達蔵  
 東京教育大学助教授 市川 正己  
 横浜国立大学助教授 成田 頼明  
 日本大学短大ドイツ文化研究会  
 東京外語大学助教授 岡本 康雄  
 日本大学教授 名東 孝二  
 明治学院大学助教授 増田 茂樹  
 独協大学講師 高橋 正男  
 横浜国立大学助教授 池畑 光尚  
 明治学院大学教授 村上 和男  
 独協大学講師 石井摩耶子  
 道徳科学研究所大田事務所 麻生 誠  
 東京学芸大学助教授 田中 昭二  
 東京大学助教授 色川 大吉  
 東京経済大学教授 宇田川璋仁  
 横浜国立大学助教授 荒川 幾男  
 東京経済大学助教授 金子 六郎  
 東京農工大学助教授 金子 六郎  
 東邦大学新入生オリエンテーショ  
 ン  
 青山学院大学助教授 三輪 修三  
 東京学芸大学助教授 藤原 喜悦  
 明治学院大学教授 重田 信一  
 東京外国語大学中国語科学学生会  
 武蔵工業大学教授 荒川大太郎  
 武蔵工業大学教授 三木 韶  
 武蔵工業大学教授 中岡 二郎  
 上智大学カトリック学生の会  
 東京女子大学教授 高田洋一郎  
 専修大学教授 津田 昇  
 中央大学助教授 鮎沢 成男  
 日本大学社会福祉研究会  
 日本建築学生会 萩野 光憲  
 日本大学教授 都立大学教授 東 洋一  
 都立大学教授 東 洋一

◆五月

日本大学教授 金丸 重嶺  
 津田塾大学及び日本女子大学アメリ  
 カ研究会  
 東京学芸大学助教授 谷 俊治  
 慶応大学助教授 池井 優  
 青山学院グロリアス・クワイア  
 順天堂大学リーダーズキャン  
 法政大学教授 芝田 進午  
 学生文化フォーラム  
 明治学院大学児童問題研究会  
 早稲田大学教授 井上 宇市  
 法政大学教授 栢野 晴夫  
 東京大学教授 川田 侃  
 都立商科短大新入生オリエンテ  
 ション  
 立正大学助教授 杉沢 新一  
 明治学院大学教授 磯部 浩一  
 津田塾大学フレッシュマンキャン  
 プ  
 成蹊大学助教授 広野 良吉  
 共立女子大学芸文サロン  
 慶応大学教授 谷下 市松  
 早稲田大学社会科学研究所  
 東京工業大学教授 佐藤 和郎  
 横浜国立大学講師 小川 捷之  
 明治学院大学教授 河野 一英  
 慶応大学教授 小竹 豊治  
 立教大学英米文学研究会  
 都立大学助教授 湯浅 欽史  
 職業訓練大学校新入生オリエンテ  
 ーション  
 日本機械学会パラエティ・プロダ  
 クション  
 日本国際問題研究所  
 法政大学教授 田沼 肇

◆六月

東京学芸大学教授 小林萬壽男  
 中央大学教授 近藤 圭一  
 中央大学講師 北川 隆吉  
 恵泉女学園フェロウシップ  
 白梅学園短大オリエンテーション  
 明治学院大学講師 吉田 裕  
 青山学院大・立教女学院短大合同  
 民間伝承研究会  
 都立工業短大助教授 矢田 博  
 青山学院大学助教授 坂井 正廣  
 東京大学教授 京極 純一  
 東京学芸大学教授 有賀 純一  
 早稲田大学助教授 内田 正助  
 武蔵工業大学教授 広瀬 謙二  
 立正大学教授 石川 与吉  
 千葉商科大学助教授 大友 立也  
 一橋大学助教授 好美 清光  
 東京経済大学助教授 江夏美千穂  
 電々社電気通信研究所  
 (研究管理者訓練)  
 第一回学内共同セミナー 上智大  
 学  
 日本女子大付属高校 一番ヶ瀬康子  
 明治学院大学教授 河野 一英  
 東京工業大学教授 内藤 正  
 東京経済大学助教授 依田 精一  
 日本大学マンドリンクラブ  
 三井化学工業 (部長研修会)  
 一橋大学講師 竹内 啓一  
 慶応大学教授 村井 実  
 東京大学助教授 小堀 巖  
 一橋大学助教授 佐々木潤之介  
 立教女学院短大教授 宮崎 申郎  
 明治学院大学教授 徳永 勇雄

東京大学教授 齋藤 真  
 日本航空電子労使関係同友会  
 会計検査院審議室 松田 武彦  
 東京工業大学教授 深沢 宏  
 一橋大学助教授 河部 利夫  
 東京外国語大学教授 千綿寿賀子  
 群馬女子短大講師 千綿寿賀子  
 中央大学経済研究所 岩瀬 孝  
 早稲田大学教授

■編集後記■

上代先生の誕生日は七月三日  
 なので、その日に八三歳のお祝  
 いをしたいと思います。が私の念願  
 でもあったが、日常の用務に追  
 われ、準備が進まず、殊に何人  
 かは必ず出席できる日でなくて  
 はいけないので、七月二六日に  
 実行することになった。そして  
 七月五日が本当の開館三周年記  
 念日に当るのであるが、この方  
 も二六日に延ばし、二つのこと  
 を一緒にしたのである。

八三歳は長寿である。お祝い  
 の贈物は何かよいか楽しみなが  
 ら苦心して考えたのが、第六群  
 の中庭に小さな池をつくり、そ  
 の池に細いせせらぎを流し、小  
 鳥に水あびの場を提供しようと  
 いうことになった。大原恭子先  
 生の考案も少し入っている。こ  
 うした美しい話を数多く書きつ  
 づるのがセミナー・ハウスの歴  
 史なのである。(飯田生)